

動物園への遠足と反省

吉 田 美 智

返る十一月七日左記の要領で遠足をおこなったが、それについて反省をまとめてみました。

一、場所 大阪市天王寺動物園

時間、九時二十分～十五時三十分。参加人員、二年保育三十五名、

一年保育四十名、それに保護者の

希望者七十四名 職員六名(内先生は二名)

二、現場における指導と反省

当日はさいわい良い天気恵まれたが、風がつめたかった。やはり時季としては十月中におこなった方がよいように思った。集合は奈良駅に汽車の発車前二十五分、乗車時間一時間、下車駅より徒歩で約十分。動物園に着く。まず幼児と保護者が二列に並び見学を開始す。人数の関係で説明が徹底せず親まかせになって困った。こんな場合、保護者を少なくすること

も考えられるが、参加希望者が多いので、やむなく全部同行した。

現場指導の点から来年からもう少し隊形や区分けを考える必要があると感じた。中食は五十分の自由

行動を許したが、二三の保護者が売店で玩具類を買って園児に与えていた。事前に保護者に対する注意を徹底させておかなかつたのは失敗であった。また時間の配分が適切を欠き、幼児の好きな動物の所でじゅうぶんに見ることが出来なかつたのは残念であった。お菓子五十円以下に制限して各自持参させたが、今度の場合は良かった。

三、実施後の指導と反省

翌日は疲れの為、とくに休む者はなかつた。話し合い、動物の自由表現をして、平日より一時間早く帰宅させた。二日目より、八日間

にわたり動物園ごっこに展開したが、あきることなくよろこんでいた。奈良には安全で美しく、広い公園があつても、珍らしい動物を見たり、汽車に乗ったり出来る場所を遠足地として撰ぶのも良いと思つた。また海のない県なので、広い海、汽船、燈台などを見せてやることが出来たらと考えるが、時間や経費の点で実施出来ないことを残念に思っている。

私がお茶の水の幼稚園時代にクローバの花が咲いている本校の草原へ及川先生に連れていっていただいたことがおりにふれて思い出される。あの頃は、ずいぶん遠くまで歩いたものだと思つていた。そして何より楽しかつたのですが時代の移り変りとともに幼稚園の遠足もずいぶん変わったものだと考えさせられます。

(奈良学芸大学付属幼稚園)

半年ばかり前から二・五軒離れた住山という戸数七十戸の部落へ

四軒迂回して国鉄バスが通るようになり、幼稚園から一歩出た所に

桐 井 つ た

遠 足

<遠足・運動会の反省>

一、実施前の指導および反省

遠足の五日前より象、熊、河馬などの歌を唱い、動物園の本を毎日

少しずつ読んで聞かせた。動物の習性などはかなり深いところまで

興味を持って聞くので幼児の発言を重んじながら進めていった。一

般に男児の方が興味が強く、IQの高い者や観察的なことを好まない

幼児には、紙芝居やスライドを利用した方が効果的であった。ス

ライドも動物の習性を童話的に、

其中へ入れ実習とミックスして

映写したらよかつたと感じた。またリズム遊び其の他で交通道徳や

整列の練習をおこなつておいた。

停留所もできた。朝夕は別として、昼間三往復のバスはあれでよく採算がとれるかしらと首をかしげるくらい、いつもお客は二、三人だ。

バスの終点から五百米ぐらいの所に円福寺という禪宗黄檗派の古刹があり、山門園池をはじめ、鼓楼・経堂・本堂の配列、よく禪宗伽藍の様式を伝え、境内も広いときて、毎年適当な遠足の目的地がなくて困っていた矢先のこと、往きはバス利用、帰りは徒歩で遠足したら、ということに意見が一致、土地にあかるい人を先頭にまず実地踏査を試みた。

豊かそうな部落は今、取入れの真最中、澄んだ空気は空高く晴れあがって鈴鹿連峯がくっきりと浮出してみえる。

「不許入葦酒山門」と書いた石の門から山門までの山道にも、広い境内にもしいの実がたくさん落ちている。いちようやかえでの紅葉が目にしみるようだ。どこかのおばあさんが横見もせずしいを拾っていた。お寺のおしようさんは

「幼稚園の子が遠足に来ると前からきいていたら、繩をはって人が拾わんようにしておいてあげたのだが」とおっしゃる。

危険な所は全然見出せない。お弁当をひろげるのに適当なきれいな場所もある。しいや木の葉を拾って、カリキュラムの木の実木の葉の遊びへも発展できる。一同すっかり気に入って帰るとすぐ、バスの交渉を試みた。十時二十五分の定期便と、それに近づいてもう一台大型をまわしましょうと快諾。バス代園児ひとり四円。

遠足は十一月八日と決定。翌日家庭通信で連絡すると、それは大喜び、次の日バス代を忘れてきた人はほとんどない。

「先生、遠足早う来てほしいなあ。」
「バスどこから乗るの、幼稚園の横から。」
「お菓子持って行ってもいいの。」
一週間の待遠しいこと。砂あそびやシーソーをして遊んでいることもの口からも遠足の歌が流れる。前日、じょうぶな紙屑入袋を

二つくらい用意して、ごみは全部その中に入れてちらかさないこと、バスはレディーファーストで女の子を先に坐らせてあげることに、三人ずつ腰掛けること、押合

いしないで乗ること、おやつは無茶に多く持っていないこと、みだりに草や木を折らないことなどよく相談し、約束する。

わたくしたちは救急袋とズボン・パンツの用意を整える。
当日もまた、すばらしいよい天気。いつもより早くからリュックサックを一ぱいにふくらませたにこに顔の姿が登園する。

園庭で整列し、もう一度きのうの約束を繰返し、時間前に停留所まで進む。

「アッ、きたきた。」
思わず手をたたいて大はしゃぎ。だが押合う者はひとりもなく、前から順に乗って、後の席から次々と席をかけていく。坐れなかった男児は運転手の後の方へ立つて、これも大喜び。心配した座席の取合いなど全然なくて、スムーズに全員乗車、三人乗っていた

お客さんにも迷惑をかけなかったようだ。おかあさんたちと一しょの旅行にくらべて、何とすっきりしていることだろう。思わず胸が熱くなる。

「さよなら、さよなら。」
道ゆく人にも手を振っている。
「あつこの道、いもほりに通った道やが。」

「あれ、八幡さんへ行く道やな。」
三、四人を除いては、はじめて乗るバス路線だ。全員総立ち、座席は全然いらなくらいだ。

間もなく終点住山、所要時間十五分。よろこんでいる間に来てしまった。

下車も至極スムーズに終る。すぐ整列して円福寺へ。前にきめた組々の場所でのしいの実を拾う。ふと見上げると、風が吹くたびに銀色の小さな葉波がよせては返して躍るようだ。昔は全山しいの木ばかりで飢饉の折の難民救済に使った由、今は次々と切倒してしまつたが、それでも大きい木だけで二十数本はあるでしょうとのこと。続いて後続部隊も到着。それぞ

れの位置でしいの実拾い開始。

落葉や草をかきわけて丹念にさがしている子、一つ拾っては先生に見せに来る子、おかささんへのおみやげだと、手に一ぱいのしいをよろこんでいる子、しい拾いをやめて、山道や雑木林を走り廻っている子、落葉集めをしている子、

あちらこちらに歓声がある。ピリピリピリ、「おやつ頂きましよう。」

「あ、うれしい。」

「先生、この紐ほついて。」

「水筒の蓋とつて。」

「柿むいて。」

先生は実に忙がしい。

三十分ばかりして、ピリピピ

リ、

「お弁当も頂きましよう。」

またしばらくがわめきが始り、お

すし、おにぎりなど、それぞれの

お弁当に舌鼓打つ。

お弁当を食べ終ると、すぐまた

しいの実を拾っている子、いちよ

うやかえでの葉っぱを集めている

子、築山にのぼって遊ぶ子、経堂

のまわりでかくれんぼする子、木立に入って「まつたけだ、まつたけだ」と叫んでいる子、先生と石

畳のお堂で仏さんをおがんだり、庫裡の前の魚板に見入っている子、用意してきたクレパスで写生している子。わたしたちも、まだまだおりたいようだけど、時計はもう一時半。

ピリピリピリ「集まれ。」

「なーんだ、もう帰るのか。」

「先生、もつとおろに。」

「先生、また来うな。」

「わたしこんどの日曜におかさ

んと来うや。」

みんなでごみを拾って一とこ

ろに集める。

帰りはふたりずつ手をつないで

歩くこと、おやつを食べながら歩

かないこと、家の前まで来たら、

先生さよならをして帰ることなど

を約束して遅く着いた組から順次

出発。

今までのように、年小組にもえ

らいえらいと言って足をひきずる

子もなく、一回元気に二時過ぎ園

に帰着。

「先生、きのうはよかったな、また連れてつて。」

「バス素敵やったな。」

「おかささんにしいをいってもちろ

て食べたに。」

「わたしも、百あったに。」

自然ときのうの楽しかったこと

が話題にのぼる。

「遠足にいったこと、絵に書きま

しようか。」

「うん、書く。書く。」

みるみる中に、バスに乗っているところ、しい拾い、山門、魚板、お堂、おべんとう、帰り道など、いろいろの絵ができあがった。うまく組合せたら一連の紙芝居ができあがり、拍手喝采の中に、きょうもまた楽しい一日が終った。(三重大学付属幼稚園)

天の橋立遠足の記

松谷郁子

昭和〇年当市で初めてトレイラーバスが、登場した頃のことである。幼稚園の前を走ること幼児たちはかけ出してこれを見送る。好奇と羨望の交錯した眼。このバスはほとんどわが園の前を通る時は座席があいている。何とかなら

ないものかなあ」と考えた私は、バス会社に交渉、承諾を得て駅前までの三分間ほどをのせたのが乗物による遠足のはじまり。それが

幾変更して現在の天の橋立遠足となったのである。○事前の注意
普通の遠足以外とくに汽車遠足として
・順序正しく
・敏捷に行動
・窓から頭や手を出さない
・座席のかけ方 など
「汽車やバスに乗る時は……うたもともに指導」
○実施に当って私たちの配慮